エコレザー座談会

渡辺 喜夫氏
（株式会社Labo代表取締役社長）

吉村 圭司氏
（NPO法人日本皮革技術協会 副理事長）

稲次 俊敬氏
（NPO法人日本皮革技術協会 副理事長）

木と革は相性のいい天然素材。エコレザーを住宅建材に使う

渡辺社長

お客様の思いを取り入れたLaboの注文住宅

吉村　今月号の座談会には、住宅業界の方にご登場いただきます。

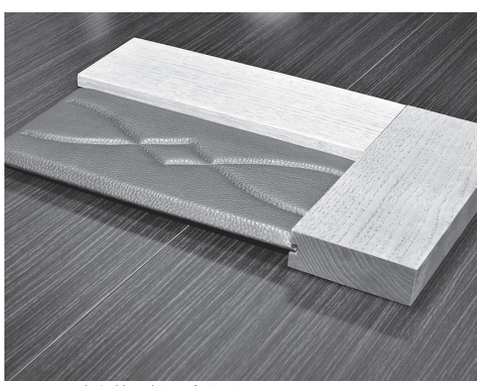
㈱Laboの渡辺喜夫社長です。御社が設計・施工する住宅には、日本エコレザー認定の革が使われています。その狙いや評価などについて、お話しいただきたいと思います。

最初に会社内容や住宅づくりの姿勢についてお話しください。

渡辺　Laboは不動産・建設事業を行うグループの建築部門として発足した注文住宅の設計・施工を行う家づくりのプロ集団です。

なお、グループの設計・施工に関するマニュアルは私が社員の時に整備して参りましたので、私が「ものづくり」の創業者と思っています。

また、Laboはグループ会社からの業務受託が中心ですが、10年ほど前からは単独でも注文住宅を手がけています。5年前にはモデルハウスも完成し、現状は年間30棟ほど建築しています。


木と革の組み合わせ

Laboは、人を中心とする家づくりを理念とする会社です。押しつけではなく、お客様が望むものを最大限提供するのがLaboの家づくりです。

よく住宅を"作品"と呼ぶことがありますが、私たちはそのような言葉を使いません。なぜなら、住宅は人間が生活を営むための器であり、芸術作品ではないからです。

革製品と同じように、住宅にも感性価値を求めたい

吉村　最近は住宅に快適性を求め、自然を感じたいという需要があるよ

日本エコレザーの6つの条件

1 天然皮革である
2 発がん性染料を使用していない
3 有害化学物質の検査をしている
（ホルムアルデヒド、重金属、PCP、禁止アゾ染料）
4 臭気が基準値以下
5 適切に管理された工場で作られた革
（排水、廃棄物が適正に管理された工場で製造）
6 染色摩擦堅ろう度が基準値以上

吉村氏

うですね。

渡辺　国のデータでは新築住宅の着工は減る傾向にありますが、人間が住まいにさらなる快適性を求める限り、新築はなくならないと思っています。

　その快適性は、性能だけではなく、住宅の全てを我々プロが提案して、その中に顧客が住まうのではなく、お客様が考えた部分を1ヵ所でも2ヵ所でもいいから、住まいに取り込むことで得られると思っています。

　要するに感性価値による快適性です。

稲次　それはまさに皮革の世界と同じですね。革製品を持つこと自体、自身の感性価値を高め、満足感が得られるからです。

渡辺　居心地のいい住宅空間というのは機械的な性能価値ではなく、自分の好む材料だったり、空間構成であったりします。

　お客様が思い描いていたものが住宅空間に取り入れられると満足度が高まり、それが快適性につながります。

　Ｌａｂｏはそんな泥臭い、人間的な提案ができる住宅を追求しています。

吉村　そういう考え方をするようになったきっかけは何だったのでしょうか？

渡辺　私は、少年期は貧しく、住宅に憧れがありました。

　しかし、今でも戸建住宅には住まないようにしています。

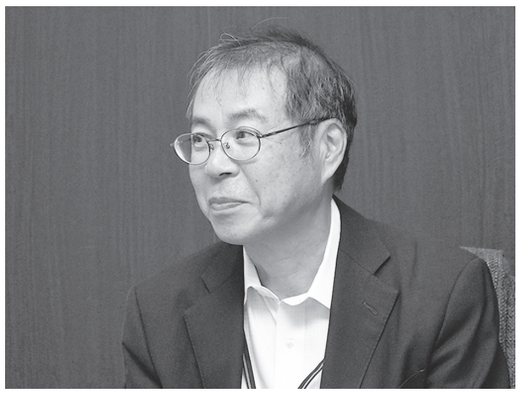
　建築設計者にとって、自分の住まいを設計して建てるということは、ある意味、ゴールに到着することを意味します。すると、後は自分の経験値をお客様に示すしかなくなります。

住宅のドアの中央に革が使われている

　常日頃何かと不自由な住生活を続けるということは、「こういった住宅に住みたい」、「ここが気にいらないから改善しよう」というように、お客様目線で考えられるような立場に居続けられるからです。

木も革も手入れすれば〝経年美化〟する

稲次　私が勤務していた大阪府の皮革試験所で卒業研究をされていた学生と十数年ぶりに再会しました。彼女は、今は住宅会社に勤めており、革と住宅をコラボしたら面白いのでは


稲次氏

ないかという話で盛り上がりました。会社に戻ったら勇気を出して社長に話してみると言っておりましたが、まさかこうして現実になるなんて思ってもみませんでした。

渡辺　突然、彼女が木の留め具が使われた自分の革の財布を見せてきて、「木材と革は合うと思いませんか?」と熱く語るのです。

そういえば、雑貨や家具には木と革は使われているが住宅にはあまり使用されていないと気づき、大変興味を持ちました。

私はもっと革の事を知りたくなり、稲次さんの研究所を訪問したのが今回のプロジェクトの始まりでした。

それまで革の知識は全くなかったのですが、稲次さんから革の話を聞き、家づくりに使用している木との共通点があることに感動しました。

木については、美容家の佐伯チズさんと共に取り組んだ「癒しのある住まい」というプロジェクトを通して、木と住まい」というプロジェクトを通して、木という素材が持つ奥行きの深さを知り、天然木の素晴らしさに衝撃を受けたことがありました。

台風の強風にさらされ、折れないように耐えた木は、板にした時にその痕跡が残りますが、革も動物がケガすると傷もつき、その跡は鞣(なめ)した後も残ります。

年月が経つほど木に風合いが出るように、革も使えば使うほど味が出てきます。

これを私たち建築家は〝経年美化〟と呼んでいます。

味わいのあるモノは決して劣化するのではなく、美化していくのです。

吉村　経年劣化ではなく〝経年美化〟ですか、いい言葉ですね。

ところで、革を建材の一部として使うときの難しさは、どんな点でしたでしょうか?

渡辺　はじめは天井に使おうと考えました。

すると、革を使う意味がないと、おしかりを受けました。

触れて感じて初めて革の良さが分かるのですから、手で触ることのできるドアの一部やベッドの背もたれの部分に使いました。

木は単体より革と一緒に組み合わせることで、木の良さが改めて引き出されることがわかりました。

新鮮だったのは、建築の概念には無かったステッチという技法です。

建材はできるだけ継ぎ目のないものを使おうとするので、革にステッチするというのは想像できない世界でした。

これでデザインの幅が広がるのを感じました。

端材を利用し「誕生石」のように月別に違った木を「誕生木」として物語とともに発信する

日本エコレザーを使った安心・安全な住宅

吉村　その革に、日本エコレザー認定の革を使おうと思ったのは、なぜでしょうか?

渡辺　住宅建築では、建築基準法が2003年に定められ、シックハウス症候群が注目され、特に、ホルムアルデヒドなど、人体に害を及ぼす材料

渡辺社長

は使ってはいけないことが定められました。

日本エコレザーの認定基準には住宅で使う建材と同じようなことが書かれており、これならぜひ利用してみたいと思いました。

これなら安心・安全な住宅としてお客様に提案できると確信したからです。

稲次　皮革産業にとっても用途拡大、需要拡大が見込めますのでありがたいお話ですが、お客様の反応はいかがでしょうか？

渡辺　まだモデルハウスで提案している段階ですが、ベッドの背もたれに革を使ったものに関心を持たれました。

クッション性があり、鉄と違って熱伝導率が低いことで、触っても冷たく感じないことも、愛着を感じると同時に、心地いいものに感じられるようです。

佐伯チズさんとのプロジェクトで学んだ木の物語は、「誕生石」の木バージョンである「誕生木」の開発へと発展し、12か月の誕生月に合わせた物語と共に発信しています。

その「誕生木」の3月の木である檜（ひのき）や5月の杉に代表される国産材は、特に革と相性がいいようです。

住宅の中に革をどのように取り込むのか、いろんな材料をどう組み合わせ、それぞれの優れた特性同士が喧嘩をしない形でどう使っていくのかを考えることは、とても楽しいですね。